
水曜日の朝は二度目のコーヒーを

徳次郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水曜日の朝は一度目の「ヒーヒー」を

【Zマーク】

Z8088C

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

菅沼明久は以前からよくデジャヴに遭遇する。しかもそれは決まって水曜日。もしかしたら、自分は水曜日を一度繰り返しているのでは?そんな思いを抱く彼に在る日突然の悲劇が。娘のまど香が交通事故で重体となり、植物状態の可能性も……しかし、それは水曜日の出来事だった。彼に一度目の水曜日はあるのか……

プロローグ【1】朝の風景

初めてそれに気がついたのは何時の事なのか、もう忘れてしまった。

今更それを思い出して意味が無い事は判っている。判つていても、やはり記憶を辿つてみては深い霧の中にはまり込んで身動き出来なくなり、結局後戻りの繰り返しだ。

結婚した後だと言う事は確かなのだが、一人娘のまど香が生まれた後か、それとも以前に気付いていたのかは記憶が定かでない。

ほら、この感覚。これだ。コーヒーに入れる砂糖をほんの少しテーブルに溢しだけなのに……

水曜日には、何故か不思議な感覚に囚われる事が多い。

何が不思議かと言つと、何だか以前に同じ事をしたような気持ちになるのだ。

一般にそれはデジャヴと言うそつだが、科学的検証では初めて行った行為や目にした風景、事柄が昔の記憶と混同して脳が認識してしまう為に起こるのだそうだ。

しかし……本当にそうなのだろうか。

もしも、今日と同じ日を以前にも経験しているとしたら……いや、それはありえ無い事だが……もしもそつな、頑張ればもつと色んな記憶が蘇えつてもおかしくは無いだろう。

その奇妙な感覚は、毎週では無いものの水曜日に限つて起こる。自分でも気のせいだと思い、ある時期記録を付けてみた。

何か以前行つたような、前にも見たような気がしたら手帳にその日付と時間を書き込むのだ。

……間違いなかつた。自分は水曜日に限り、デジャヴを感じ取るのだ。

何かこの曜日に特別な理由があるのだろうか。

ひたすら科学的に検証するならば、水曜日が何らかの心理的要因

を引き起こし、自分の記憶、又は脳そのものを刺激して履き違いを起こさせていいるのだろう。

今こうして朝の「コーヒーに砂糖を入れる行動も以前に経験したような気がする。いや、もちろん毎朝コーヒーは飲むしその度に砂糖とミルクも入れる。

しかし、今テーブルにほんの少しだけスプーンから落ちてしまつたグラニュー糖の姿を、何故か最近見た記憶があるのだ。

経験したと言うのが正しいだろう。

だからそれがデジャヴと言われればそうなのかもしない……

それでも自分の中ではどうにも納得が出来ずに、認める事は出来ないようだ。

もしも自分自身が考へている通りの事が起こつてゐるならば……いや、これはあまりにも非科学的な考へなのだが、それでもどちらかと言へばそれが自分的にはシックリ来る。

理由や原理なんてものはどうてい想像もつかないが、この考へは全てを納得させるものなのだ。

俺は水曜日を少なくとも二度繰り返している。

先に言つた様に毎週ではないのだろう。何も感じない水曜日もあるのは事実だ。

しかし、もし本当に水曜日を二度繰り返してゐるとすれば、その鮮明な記憶さえ自分に刻み込めたとしたら……

刻み込めたとしたなら……競馬へ行こう。

水曜の朝目覚めると、何から何まで意識的に行つようになつた。二度目に記憶をつなげる為に。

今この水曜日が一度目なのか二度目なのかは何かを感じるまでは判らない。だから、できるだけ何をして、何を考えたか記憶の中央に刻むようにしている。

それでも気がつくとデジャヴに襲われることも多く、この水曜日はもう一度目ではないのだと落胆せざるおえなくなる事が多い。

しかし、もし三度目が在るとしたら……

俺はいつたい、水曜日をどれだけ繰り返してから翌日へ移行するのだろうか……

木曜日は確実に訪れ、金曜日も週末もちゃんとやつて来て次の週を迎えているのだから、永遠に水曜日に囚われる心配はないものの、実際に何度も同じ日を繰り返しているのかは、実感がないので全く判らない。

解っている事は、自分の非科学的推測に基づくと、最低一度以上は水曜日を繰り返していると言つ事だ。もちろん毎週ではないのだろうが。

そしてそれは、在る意味周りもそうなのだろう。

それに気付くか気付かないかの違いなのだ。

もしかしたら、自分は水曜日だが、妻の祐美子は月曜日なのかもしない。娘のまど香は土曜日という事もありつる。

とすると、なにも繰り返しているのは水曜日ばかりではない事になる。

誰かが繰り返せば、この繋がった日常の空間と時間は結局自分も繰り返しているのだから。

それぞれがそれぞれに違う曜日を繰り返して、七日以上在る本当の一週間が過ぎていくかもしない。

しかし、それに気付かないものにとつての一週間は、確実に七日なのだろう。

それでも、それに気付いたつもりでいる自分ですら記憶が無いのだから、一週間を七日以上で数える事はできない。

「…… わん。お父さんつてば」

声が聞こえて菅沼明久はまじみの中で薄つすらと開ける視界を見つめた。

「お父さん。早く起きないと会社遅れるよ。今日会議つて言つてなかつた？」

田の前で声を立てながら身体をしきりに揺すつて居るが、娘のまじ香だつた。

今年中3になつたまじ香は、たいした反抗期も無くいつして度々父親を起こしに来たりもする。

身体はまだまだ子供だが、何処かしつかり者な所は母親似のようだ。

「ああ、そうだつた。今日は一時間早く起きなくちゃいけなかつたんだ」

菅沼はそう言いながら、まじ香に布団を剥ぎ取られて寝癖の髪の毛を撫でながら起き上がつた。

「やだ、お父さんつたら田覚まし時計、何時もの時間のままじやん」「えつ、やうだつたか？ そりや、せばかつたなあ

「もう、ひと事みたいに」

まじ香はそう言いながら大きな瞳を細めて明るく笑つた。

生まれつき長い睫毛は、マスカラでも着けて居るのではと時折教師に捕まつてジロジロ見られるほど鮮明に彼女の瞳を縁取つて居る。笑うと半分閉じた睫毛が、より一層黒々とするのだ。

「ご飯できるからね。早く食べちやつてよ」

彼女は剥いだ布団をさつとベッドの上に直してから、部屋を出て行つた。

肩口に掛かつた黒い髪を揺らしながら部屋を出るまじ香の後姿を眺めて彼は、何時の間にかウエストの括れが大分ハッキリとして来た事に気付いて、勝手に頬を赤くした。

「なんだよ、わかめの味噌汁か」

菅沼はちょっとびり不満げにダイニングのテーブルに着いた。

ベーコンエッグとウインナーの皿にはキャベツの千切りが添えてあり、その横にはわかめの味噌汁が置いてある。

「俺、わかめ嫌いなの知ってるだろ」

菅沼の会社は始業が九時半なので、普段は八時頃起床する。会社まではバスで十五分ほどなので、朝はかなり楽だ。

娘のまど香は、何時も七時五十分には家を出るので彼女が出かける姿を彼は何時も見ていないのだ。

もちろん、早出の時には今日のよつこじに来てくれる事も多い。

つまり、娘の登校時間に対しても菅沼が無頓着なだけなのだ……

「お母さんは今日帰つてくるんだ」

「そうよ。夕方着くつて言つてた」

菅沼明久の妻裕美子は、町内会の一泊三日の慰安旅行で箱根へ出かけている。

あまり出かけたがらない彼とは正反対の裕美子はあちこち出かけるのが好きで、パートで稼いだ給料の半分は自分の旅行などに当っている。

それでも主婦のストレスを理解してやりたい気持ちのある菅沼は、家庭さえ円満ならばそれでいいと割り切っている。

もともと三人が食つていける給料は自分が稼いでいるし、賃貸マンションながら貸し駐車場にはマイカーも所有している。

それに、裕美子がいない日の夕飯は、朝食同様まど香が作ってくれ

れるので、女としての些細な成長が見えたリして、ちょっとした楽しみでも在るのだ。

「行つてきまஆす」

一端自室へ戻つたまど香は鞄を手にすると、ダイニングへ顔だけ出して玄関に向つた。

「おひ、気をつけてな」

彼はダイニングで朝食を頬張りながら声だけで娘を送り出し、玄関ドアの開閉音を聞く。

朝食は和食が多いが、菅沼は何時も食後にコーヒーを飲む。

今朝もまど香が気を利かせてしつかりとコーヒーをドリップしてくれたようだが、もうあまり時間が無い。

「しようがない……今日は会社の自販機で我慢するか」

そう呟いて、コーヒーメーカーの保温をOFFになると、彼は部屋に戻つてスーツに着替えた。

【2】通勤（前書き）

申し訳ございませんが、3話から本来の展開にはなります。
ただ、1、2話も少し重要ですのでご辛抱お願いいたします。

【2】通勤

五階建てのマンションは一世帯の作りは比較的大柄で、ワンフロアーに三世帯ずつしか入っていないので、全部合わせても15世帯しかない。

菅沼家は五階の南西角側に位置する場所にあった。3LDKに意外と広いバルコニーも付いているし、家族三人で暮らすには充分だ。この物件を見に来た時に、妻の裕美子がたまたま夕陽が沈む姿を見て、酷く気に入り、彼女の要望で決めたのを覚えている。確かに夕刻家にいる彼女が見る景色は、考慮するべきなのかも知れないと思つたからだ。

決して彼女の尻に敷かれて決定権を全て持つていかれているわけではないのだな……おそらく。

菅沼がマンションのエレベーターを降りると、管理人が玄関先を掃除していた。

何時もより一時間早い出勤なので、普段は出くわさない光景にも会つ。

「おや、今日は早いんですね」

「ええ、ちょっと会議があつて」

こうして早出の時ぐらいしか会わない管理人だが、人は良さそうだし、何時もこの建物が綺麗なのも、この管理人のお陰だと言う事は彼も何となく判っている。

「さつき、まだ香ちゃんが出て行つたよ」

「ええ、寝坊するところを娘に叩き起こされまして」

菅沼はそう言つて苦笑した。

「カワいい娘さんで、いろいろ心配なんじゃないですか？」

もう五十は越えていると思われる深いシワが、笑顔に刻まれている。確かに、このマンションの物件オーナーだと以前聞いた事がある。「いやあ、もう、ほつたらかしですよ。ボクよりよほどしつかりし

てますから

「彼は少し照れながら髪に手を当てる、小さく会釈をしてバス停へ向う。

マンションから出ると住宅街の通りが百メートルほど続いて大通りへ出る。大通りを右に曲がると直ぐにバス停だ。

菅沼は数人の先客の後ろに並ぶと腕時計に目を配る。

八時十五分。本当は一本前のバスに乗るのがベストだったが、会議の始まりは何時も多少遅れるから、何とか大丈夫だろうと空を見上げる。

晴れ渡る青い空は、朝の気温の低下と共にそのコントラストを鮮明にさせてゆく。

行き交う車の騒音に混じって、明らかなバスの走行ノイズが近づいてくる。

女子高生が一人と小さなオバサンが一人。気付くと菅沼の後ろにもサラリーマン風の男が二人立っていた。

コンプレッサーの音を響かせて開いたバスのドアから次々に客が乗り込むと、彼もそれに続く。バス特有の事務的で殺伐とした匂いがこれから仕事場へ向かう意識へと気持ちを切り替えた。

現在三十五歳の菅沼明久は二十歳の頃に結婚した。

その時裕美子はまだ狭山の短大に通う19歳だったが、もうお腹の中にはまだ香がいた。

何がキッカケで裕美子と知り合ったのか、菅沼はもう覚えていない。それだけ些細な事で知り合つたのだ。

特技が在るわけでも無く、容姿がカッコイイ訳でもない自分の何処に彼女は惚れたのか。菅沼自身も実は判らない。

それでもわざわざそれを訊こうとも思わず、気付けば彼女は妊娠。それじゃあという、意外と軽い気持ちで結婚に至った気がする。

特に秀でた才能が在るわけではない彼は、IT企業の先駆けとな

る会社へ就職し、時代の背景と共にその会社は大きくなつた。

しかし二年前に株取引の問題で会社は大きく傾き、彼も辞めざるおえなかつた。

大きな会社にいたとはいえ、プログラムが組めるわけでもない菅沼にとつて再びIT関連の企業に就職する事はどうにも気の進まないものだつた。

それでも、友人の知人が独立した会社で人手が足りないので手伝ってくれないかと誘われ、妻子を食わせなければという使命感に促されて今の会社へ入る。

六本木の会社へ通つていた頃に比べれば、家からも近い。当然手取りは下がつたがそれほど生活に困るわけではなかつた。

菅沼自身は特に何かの趣味で金が出てゆく事はなく、時折付き合いで会社帰りに飲み歩く程度なのが幸いしていたのだろう。

それでも裕美子は元々働くのを苦にしない性格で、以前からやつていたスーパーのパート時間を増やして家計を手助けするようになつた。

以前は全てを自分で使つていたのだ。もちろん、まだ香の衣服なども買つてあげていたことだろうが、基本的には菅沼が渡すお金で家計をやりくりしていた。

菅沼が再就職して間も無く、今の会社は業績を伸ばし始め、皮肉にも以前いた会社から枝分かれして不調になつた企業を吸収して利益をさらに伸ばした。

去年の暮れには成功者の城である六本木への会社移転も囁かれたが、結局それは流れた。

その代わり、通り向かいの新しく改装したビルに移り、十階建ての上半分を占領している。

今年に入つて給料も大幅に上がり、何の心配もなく生活しているが、裕美子は相変わらずパートで働き、それなりの自由を楽しんでいる。

お陰で彼女の貯金は今年になつて大分増えたようで、最近自動車

教習所にも通い始めた。どうやら自分専用の車を買つてしまつたりしない。

母親には服やバックを買つてもらつてあるまど香も、携帯電話やパソコンなどは父親に強請つて來たりする。

彼女なりに時と場合によつて強請る相手を考慮していふよつだ。それでも少し大きな瞳で笑いかけられると、つい買つてしまふのが彼の悪い癖で、先週も最新型の携帯電話をひとつそり買つてあげたばかりだ。

「お父さんは短縮一番だからね」

ほとんど電話などはかけて来た試しは無いが、娘にそう言わると嬉しいものだ。

再就職した年にはさすがに何も強請つて来た事が無いから、その割り増し分もある。

それに、何だかんだと裕美子がいない時には料理も洗濯もするまど香は、今時の娘にしては出来た娘だなどと、少々親バカな思いも当然ある。

会社の五十メートルほど手前のバス停でバスを降りた菅沼は、少し小走りで会社のビルへ向つた。

広い歩道に連なる広葉樹林の並木は最近大分葉の色をえて、殺伐とした風景で唯一秋の到来を実感できたりする。

菅沼が足早に向う先で、日の前の横断歩道を渡つて来る部下の中島麻美に出くわす。

大通りと交差する通り向いの商店街を抜けると、駅へ続いているのだ。

「ああ、チーフも遅刻ですか？」

横断歩道を渡りきつた麻美が、息を切らせながら笑つた。

「バカ言つた。まだ一分あるぞ」

コツコツというヒールの音に促されるよつこ、菅沼は麻美と一緒に会社のビルへ駆け込んだ。

通常会議は月曜日が多いが、時折臨時会議が開かれる事も多く、早出の手当では付かない役職の彼には少々損な役回りだ。

たいした能力も無いのに何故か業績はそれなりで、中途採用にも関わらず直ぐに役職に就けたのは、合併吸収した会社の社員がほとんど自分の下に位置した事と、社員の公募を増やして新人が多く入つて来たからだ。

もちろん、人並みの人望も得てはいるが。

菅沼はオフィスには行かずに、直接会議室へ急いだ。

ドアを開けると、会議前のコーヒーを飲む連中が、和気藹々『わきあいあい』とまだ雑談をしている所だった。

【3】電話

定時の帰宅時間はとうに過ぎていたが、菅沼は夕方からの会議の後、今日会った新しいクライアントの為の書類をチェックする為に会社に残っていた。

だいたい一～二時間ほどの残業はもはや定時のうちだ。

ちょうど残業が終わつた八時頃、オフィスの電話が鳴つた。

菅沼は机のパソコンの電源を落とすと、自分の内線ボタンを押して、目の前の電話に出る。

社名を言い終わらないうちに、耳にあてた受話器からは聞き慣れた、しかし聞き慣れない震えた声が聞こえてきた。

「あなた……仕事、終わる？」

「あ、ああ。今終わつたところだ」

裕美子の震える声に、彼は困惑した。

仕事場に電話をかけて来たことなど今までに無い事だ。何か今までには無い出来事が何か起こつてているという事だらうか。

「おまえ、もう帰つてたのか」

何だか悪い予感を振るり払つように、関係の無い言葉をだす。本当は「どうした？」と言わなければいけない事は察していた。

「まじ香が……」

「まじ香がどうかしたのか？」

心臓の鼓動が急に高鳴るのを感じた。どうもしないはずは無い。この震えた声は尋常じやない。

「まじ香が事故に……」

「事故だつて？」

一瞬頭が半分以上空白になつて、菅沼は妙に落ち着いた声を出した。一種の職業病なのかもしれない。緊張したり、焦つた時ほど冷静な言葉が出る。

「それで、どんな事故だ。身体は無事なのか？ 怪我は？」

直ぐに訊きたい事が頭の中を埋め沢山して次々に質問を投げかける。

「意識が……」

裕美子の声はそこで途切れるよつて嗚咽が聞こえた。

「……早く来て……」

精一杯の言葉だった。

しかし、それだけで娘の容態が酷い事は充分に伝わり、彼は敢えて静かな声で病院の場所などを訊き出す。

菅沼は急いで会社を駆け出すと、タクシーを拾つて病院へ向つた。病院へ入る際に、携帯電話の電源を切るひとつ取り出し、既に電源が切られている事を知る。

夕方の会議の際に電源を切つて、そのまま忘れていたらしい。だから、裕美子は会社の電話にかけて来たのだ。

電源を入れ忘れていなければ、もつと早く知らせを受けられただろう。そう思うと、些細な失態がやたらと悔やまれる。

正面玄関はもう閉まつていて、菅沼は急患用の通用口に回つた。ほの暗い入り口に、思わず足を止めて一端息をつく。

夜の病院は閑散として奇妙なもので、常夜灯の明かりが薄つすらとリノリウムの床に映りこんで彼を導いていた。

「まじ香はどうなんだ？」

一階の手術室の前にある廊下の長椅子に腰掛けっていた裕美子を見つけて、菅沼は足早に歩み寄る。

「今、緊急手術を」

「何処を怪我したんだ？」

「腕も足も……いっぱい骨折してるわ」

「そんなにか？ 何があつたんだ？」

しかし裕美子の口から出たのはその答えではなかつた。

「まじ香の携帯電話は、短縮一番があなただつたそうじゃないの。

どうして今日に限つて携帯が通じないの？」

まど香は本当に父親の携帯番号を短縮一番に入れていたのだ。しかしそれが今日に限つて役にはたたず、ちょうど旅行から帰宅途中の裕美子に連絡が入つたのだ。

「すまない……会議で電源を切つたきり、忘れて……」

菅沼は思わず俯いたが、裕美子もそれ以上彼を責めるつもりはない、先ほどの問い合わせに答えた。

「ひき逃げよ。塾へ行く途中に車がひき逃げして」

「ひき逃げだつて？」

裕美子は菅沼から視線を外すと、俯いたまま頷く。

「それで、まど香の容態はどうなんだ？」

彼の言葉に裕美子は顔を上げたが、一瞬言葉に詰る。

「まだ判らないわ……でも、頭蓋骨が陥没して……」

彼女は泣き崩れるように、長椅子に手を着くと「脳の一部にダメージがあるつて……」

一瞬で菅沼の思考がぐるぐると渦を描いた。

振り返つて手術中の赤いランプを見つめると、それはぼやけて滲んで、赤い炎が溶け出すようにグニャグニャと変形した。

幼い頃のまど香の元気な姿が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、最後は今日見たばかりの笑顔に変わる。

それはあまりにも無邪氣で、きらめく瞳の虹彩だけが残像となつて彼の脳裏に何時までも残つた。

菅沼は裕美子の隣にゆつくりと腰を下ろすと、彼女が知る限りの事故の状況を聞いた。

少しして、コツコツと言つ足音が廊下の向こうに響いた。

それが近づいて来ると、通常エレベーターへ続く廊下の角から一人の背広の男が現れて、黒い人影はほの暗い廊下にも同じ色の影をゆらゆらと落としていた。

地味な安っぽいスースを纏つた一人組みは、菅沼と裕美子の一人に近づいて歩く速度を落とした。

「菅沼まど香さんのご両親ですか？」

声を出したのは四十代くらいだるうか。明らかに菅沼は自分よりも年上だと感じ取った。

怪訝な表情を見せる彼に、男は黒皮の小さなケースを取り出して見せた。

警察のＩＤカードだ。

菅沼はそれを見ながら椅子から立ち上がって「ええ、そうですが「娘さんを轢いた犯人が出頭してきました」

「自首……ですか？」

菅沼は思わず、それほど離れていない刑事との距離を詰める。

「ええ、一応」

刑事の男は、背広の内ポケットにＩＤカードをゆっくりとしまつ。「念のため、飲酒検査をしたのですが、ごく微量のアルコールしか検知できませんでした」

「でも、それって飲酒つてことでしょ」

「いえ、酒気帯びになる数値でもないんです」

「それは今だからでしょ。車を運転していた時には飲酒だったんじやないんですか？」

菅沼は思わず声を荒げた。

その声で、思わず裕美子はビクリと肩を震わせる。

こんな大声を出す彼を見たのは久しぶりだったからだ。

「だいたい、大通りの直線で、信号を無視したあげく歩道に突っ込むなんて普通じゃないでしょ。他の車も一台接触しているそういうやないですか？」

「それが、その場から逃げてしまつた者の、その時の飲酒状態は立件が難しいんです。もちろん、私達も全力は尽くします」

「そんな……それじゃあ逃げ得つて事ですか？」

椅子に腰掛けたままだった裕美子も思わず立ち上がる。

「いや、それは何とも……ただ、ひき逃げの罪も法改正で重くなつてますから」

「やつ言い問題じゃないでしょ」

菅沼は、淡々とした刑事の態度が無性に腹立たしく思えた。いかにもひと事として話しているようにしか見えない。

二人の刑事は、一端署へ戻るがまた直ぐ来ると黙つて引き返して行つた。まじ香の生死の状態が、犯人の罪状に直接関わるからだろう。

それからどのくらい経つたのか、菅沼にも裕美子にもわからない。ただ、何となく腹が減つたと思った事は確かに、こんな時に腹が減るなんて自分はなんて情けない奴なのだと、菅沼は無言のまま自嘲した。

裕美子は田の焦点が合わないまま、ずっと正面の壁を見つめている。

まるで、まじ香の治療風景がそこに映つているかのようだ……

【4】コハクイン（前書き）

医療関係、医学知識に関しては、必ずしも正確性を追求してはおりませんので、了承下さい。

【4】コフレイン

小さな光が消えるのを、視界の隅で感じた。

手術中のランプが消えたのだ。

菅沼が振り返ると、裕美子もそれに気付いて振り返る。腕時計に目を配ると、もう深夜の十一時になる所だった。

手術室の扉が音も無く開いて、ほの暗い廊下に青白い光があふれ出し、ストレッチャーに乗せられたまど香の姿が現れた。

菅沼と裕美子はほとんど同時に椅子から立ち上がる。裕美子が一瞬ふらついたのを、菅沼は片手で軽く支えた。

しかし、彼の一家の主としての姿は無常にも打ち砕かれる。娘の変わり果てた姿に、彼はわが目を疑つた。

変形した顔の痣。頭部の全てを覆つた包帯と全身のあちこちに巻かれたギブス。

いつたいどんな状況下で彼女はこんな姿になつてしまつたのか。

菅沼は、さつきいた刑事の言葉を思い出しながら込み上げる怒りに、涙が溢れてきた。

「娘さんは今のところ死亡したわけではないので、犯人の起訴はもつとも重くて業務上過失傷害になると思ひます。……おそらく、せいぜい実刑でも五年に届くかどうか……」

そんなバカな。娘が死んでるとか生きてるとか、そんな事は関係ないではないか……

「オペは一応無事終了しました」

出て来た医師の声に菅沼が顔をあげると、彼は表情を変えずに説明を続けた。

「手足の骨折はそれほど酷いものではありません。ただ、頭蓋骨の陥没で脳に直接的なダメージがあります。……」

脳のダメージが自己回復し無い事は、菅沼も知っている。彼は手足を震わせながら声を出した。

「障害が残る……という事でしょうか」

彼はそれなりの覚悟をして、最悪の状況を言つたつもりだった。

しかし、医師は深い表情を微動だにせず

「……意識が戻れば幸いと思つてください」

「意識が戻れば？」

「深刻なダメージを受けている為、意識が戻らない場合もあります」

意識が戻らない人間の手足の骨折を綺麗に治して何の意味があるのだろうか……

菅沼の脳裏に一瞬そんな思いが過る。

「植物状態の可能性があるという事ですか……」

菅沼の言葉に、思わず裕美子は泣き崩れて床に膝を着いた。

「その覚悟も必要だと言つ事です。もちろん、われわれも全力を尽くします」

……どいつもこいつも全力は尽くす。全力は尽くす……そんな事は当たり前じゃないか。俺たちサラリーマンは結果が全てだ。

いくら努力されたって、結果が出なければやってないのと同じなんだよ。

菅沼の頭には、理不尽な状況へのやりきれない思いが止め処なく湧き出て思考を埋め尽くした。

まど香をこんな目にあわせた人間の罪が三年から五年？ そんなバカな事があつてたまるか。
死んでないから？ ジャア、植物状態で生きるくらいなら死んだほうがいいって事じやないか。

世の中いつたいどうなつてるんだ。

裕美子は傍にいた看護師に抱えられて、長椅子に腰掛けていた。

菅沼は裕美子を置いて、まど香の運ばれた病室へ足早に向った。まど香の病室の前は慌しかった。まだ処置の続きがあるからと言つて、廊下で何分も待たされて娘の顔はなかなか見る事ができない。半開きのドアから見える病室内には、大そうな機器類がずらりと

並んでいて、看護師がそれぞれ作動チェックなどをしながらまど香の身体に電極などを繋いでいる。

最初に繋がれたであろう人工呼吸器のノイズが喧騒の中に確かにリズムを刻んでいたが、それは菅沼にとって悲しい音でしかない。しばらくして部屋に通された頃には、看護師に支えられながら裕美子もやってきた。

何時もはつらつとした裕美子がこんなにも弱々しく感じた事は初めてだ。

同時に菅沼は、廊下に置き去りにしてしまった彼女に対しても罪悪感を抱かずにはいられず、看護師に代わって裕美子の肩を抱いた。一人でならんまま、ゆっくりとまど香のベッドに近づく。

時間が停まった様に穏やかな部屋の空気は、呼吸器の一定ノイズだけを明確に響かせる。

車に撥ねられた際にかなり強打したまど香の顔は痣だらけで腫れ上がり、あの大きな瞳は閉じられたままだ。

鼻も骨折したらしく、鼻の中に管が入れられてギブスで覆われている。

呼吸器のチューブを咥えた口から覗く前歯が、数本折れている事に気付いた。

……あんなに綺麗だった白い歯が……いつたいどれだけの衝撃を受けたのか……菅沼は思わず彼女の頬に手を伸ばし、触れようとして止まる。

「痛みは無いですか？」

触ることが可愛そうなほど腫れ上がった頬の痣に、思わず躊躇したのだ。

「意識がないから大丈夫ですよ」

横にいる看護師が言つた。

……意識がないから大丈夫……それがありがたい事なのか不幸な事なのか。彼にはもはや判断できるものではなかった。

ただ、ひたすら自分の頬を伝う涙が次々と目から溢れ出て、娘の

顔が曇に霧んでいた。

「……わん。お父さんってば」

声が聞こえて菅沼明久はまどろみの中^{ひる}で薄つすらと開ける視界を見つめた。

「お父さん。早く起きないと会社遅れるよ。今日会議つて言つてなかつた?」

田の前で声をかけながら身体をしきりに揺すつているのは、娘のまど香だった。

菅沼は何故かまど香の顔を見入つていた。

白い頬は多少のニキビの痕はあるものの、窓から差し込む陽射しを受けて陶器のように輝き、澄んだ黒い瞳は、長い睫毛に囲まれて笑みを浮かべている。

「な、なによ。そんなにジロジロ見て」

「あ、いや……何だかお前が懐かしく感じて」

菅沼は、娘の姿が無性に愛おしく感じて思わず見入つてしまつた。

「へんなの。あんまりヤラシイ田で見ないでよね」

まど香はそう言ひながら笑つて、剥ぎ取つた布団をベッドへ戻すと部屋を出て行つた。

田覚まし時計を覗き込むと、カレンダーは水曜日の表示だつた。

【5】胸騒ぎ

菅沼明久はダイニングのテーブルを見て思わず立ち止った。

「たまにはわかめも食べてよ」

まど香はそんな父親に、ご飯を差し出す。

「あ、ああ……」

菅沼は腑に落ちない表情で椅子に腰をおろす。

「デジヤヴか？ いや、これは違うぞ。だいたい寝起きからいきなり何かを感じた事なんて今まで無かつた。」

「どう考へても、今朝まど香が起こしに来た光景は以前見ている。そしてこの味噌汁……どうなつてるんだ。」

彼は奇妙な胸騒ぎがした。

微かな心臓の高鳴りを感じて、背筋に妙なざわつきを覚える。

「どうしたのお父さん、早く食べないと会社遅れるよ」

「あ、ああ」

菅沼はそう言いながら、血室へ向つまど香を田で追つた。

「あ、お母さんは今日の夕方だけ」

戸口で振り返つたまど香は「うん、夕方には帰るつて」

「……なんだ。何が在る。どうして急に色々見えてくるんだ。そして、この心のざわめきは何なんだ。」

「こんなに大きなデジヤヴなんてあるのか？ 僕の頭がどうにかなつたのか？」

「行つてきます」

玄関からまど香の声が聞こえた。

菅沼は何故かもう一度まど香の顔を見ておきたくて、慌ててダイニングから顔を出しそうが、ちょっとビダンパーで戻る玄関扉が閉まる所だった。

蒼く澄んだ空は、日増しにコントラストを上げて、秋の深まりを感じさせている。

菅沼は見上げた空を見て考えた。

……この空もそうだ。確かに空なんて何時も同じようなものだろう。晴れ渡る青空なんて今までにも何度も見てている。

しかしこの光景……上手くは言えないが今見上げている空は以前見ている。

それでも、どうして色々な事にいちいちデジヤヴを感じるのか。今までだつて何度も空は見上げているが、それにデジヤヴを感じた事は無い。

バスの窓から見る景色には何も感じなかつた。

何時もはもつと空いているバスも、時間帯が少し早いだけでかなり混み合つてゐる。

……痛つ。

直ぐ前にいた女子高生がバスの揺れに身体が振られて、菅沼の足を踏んだ。

「す、すみません……」

直ぐ謝る彼女に、菅沼も思わず苦笑いを返す。

……こんな時はどうなんだ。例えば起こる前に感じ取れたら、それを回避出来るではないか……そして、それはもう科学的根拠のデジヤヴではなくなるのだろう。ある種の予知か、それともやはり今日を繰り返していると言つ事だ。

しかし菅沼が何時も感じるのは事が起きてから、それを前に見た、前に感じたと思うに過ぎない。

今朝の胸騒ぎだつて、結局まど香の行動に朝からデジヤヴを感じたからで、田が覚める前から彼女が起こしに来る事を知つていたわけではないのだ。

「くそつ」

菅沼は思わず声に出してしまつた。

「すいません。わざとじゃないんです」

田の前の女子高生が真っ赤な顔で謝った。

「あっ、ごめん。違うよ。君の事じゃないから」

菅沼は慌てて笑みを返した。

以前から考えていた事に当てはめれば、今日は一度目の水曜日に違いない。しかし、それはもしかして自分の頭の中だけで勝手に起つてている妄想という可能性も無くはない。

そう考えると、自分は精神障害を患っているのだろうか……

菅沼は朝の会議もそっちのけで、そんなことばかりを考えていた。……いや、もう何年も起きていることだ。今更精神的に可笑しくなつたとも考え難いが、誰かに話したらきっとそう思われるだろう。何年も前から……という事事態が妄想の可能性も在るではないか。本当はつい最近思い始めた事なのかもしれない。

だから何時からそななのか明確に覚えてないのだろうか。いや、

人の記憶なんてそななに鮮明なものじゃない。

この会社に入社して最初にこなした仕事だつて、たいした覚えていないではないか。

菅沼は全く会議の内容が耳に入らなかつた。

時々聞こえる規格内容とその決定事項などは自然に頭に入つて来たが、誰の意見が取り入れられて、何故そうなつたかはまるで判らないまま会議は終了した。

「チーフ」

会議室を出て少し歩くと、背中から麻美の声がした。

「チーフ、どうしたんですか？ 何だか会議も上の空で」

「えつ、そうだつたか？ そんな事はないけど」

「なあんか、変です」

「そうか？ 僕は何時ものまんまだけど」

菅沼はそう言つて笑うと、休憩ロビーの前で

「あ、コーヒーでもどうだい？ おこるよ。今朝は飲みそびれちゃ

つてね

「やっぱ聞いてなかつたんですね。これからクライアントと商談ですよ」

「えつ、直ぐかい？」

麻美は笑うと

「じゃあ、あたしが準備しますからチーフは「コーヒーどひーど」

「あ、いいよ。自分でやるよ」

「大丈夫ですよ。あたしと一緒に行くんだから」

「えつ、ああ、そうなの」

菅沼は笑顔で立ち去る麻美の後姿を見ながら、両の目頭をぎゅつと親指と人差し指で摘んだ。

「やばいな、しゃんとしないと……」

とりあえず自販機のコーヒーを買つと、冷たい缶を一度額に当ててからプルタブを引いた。

【6】後姿

菅沼の会社はホームページの制作から広告代理、その他ネット銀行の運営まで幅広くIT関連に携つていて。

彼の部署は主にサイトのデザインなどを手掛けるが、菅沼自身がWebデザインをしているわけではない。

契約して詳しい内容が決まってから、デザイナーを交えて仕事を進めればいいので、彼の仕事はある意味仲介みたいなものだ。

菅沼と麻美は電車に揺られて、クライアントの事務所へ来ていた。瀟洒なビルを見た瞬間に再び彼の脳裏にざわめきが起る。

今朝から何度も起こるデジャヴは、明らかに何かを暗示しているように思える。

しかし、それでも菅沼にはそれが何なのかわからない。ただ、デジャヴを感じる度に何か得体の知れない不安や悲壮感が脳裏を掠める。

……なんだ。最初の水曜日に何かが起こったのか？ 彼は自然にそう感じ始めていた。神のお告げや予知などといった曖昧なモノは今まで信じた事も気に掛けた事も無い。

そのくせ自分は水曜日を何度も繰り返しているのでは？ などと思ってしまう矛盾もあるのだが、人は自分に直接降りかかった事に對して一番思考を巡らせるものなのだ。

……いつたい俺に何が起こったというんだ。この水曜日は何が起る。

「チーフ？」

入り口で、ビルを見上げたまま立ち止まっている菅沼に麻美は声をかけた。

「えっ、ああ。大丈夫だ。行こう」

「お疲れですか？」

麻美は二十六歳にしては無邪気に笑って、そう言った。

商談が終わってそのビルを出たのは十一時近くだった。

「何処かで飯でも食つていくか」

「えつ、ええ」

「あれ？ この後も何か押してた仕事あつたっけ？」

麻美の表情を察して、菅沼は確認した。

「いえ、はい。喜んで」

「喜ぶような事でもないだろ。ただの昼飯だぜ」

菅沼はそう言って先に歩き出すと、ふと通りを見渡した。何だか見覚えのある通り。それはデジヤヴではない。

明らかに以前来た事のある通りだった。

目の前の電柱に着いた学校名入りの通学路の表示を見て思い出す。

ここは娘のまど香が通っている私立中学の通学路なのだ。

去年、学校で捻挫をしたまど香を、旅行中の母親に代わって菅沼が迎えに来た事があったのだ。

電車で一駅の場所だが、滅多に来ない所だから来る時には全く気づかなかつた。もちろん、考え方をしていたせいもあるのだろうが。

「どうしたんです？」

通りを振り返つたまま立ち止まる彼に、麻美は再び怪訝な笑みを浮かべる。

「ああ、いや。ここは娘の学校の近くなんだなつて思つてさ。今まで気付かなかつたよ」

「ああ、娘さん聖和学園なんですか。優秀なんですね」

「まあ、その辺は母親似だと思つけど」

菅沼はそう言って歩き出した。

少しもしない内に、後から複数の足音が聞こえて来て菅沼と麻美は同時に振り返つた。

聖和学園の生徒がマラソンか何かで走つて來たのだ。

集団の体型からして中等部らしい事は何となく判つた。

少しバラけた先頭が目の前を通り過ぎるのを一人の視線は追つて、再び歩き出そうとした。

「お父さん」

直ぐ横から声がした。

菅沼がハッと振り返ると、足踏みをしながら息を切らしたまど香がそこにいる。

「おお、何だ。まど香のクラスだつたのか」

「もひ、最悪。走り終わつた順に終わりなんだ」

まど香は息を切らしながら「その人は……」

「あ、ああ。彼女は部下の中島君だ。そこビルへ仕事でね。不倫じゃないぞ」

菅沼は冗談交じりに返した。

まど香の額には、玉の様な輝く汗が光つていた。

「わざわざ娘の通学路で不倫する父親もいないでしょ」

まど香はそう言つて笑つと

「じゃあね」

軽く手を上げて再び走り出し、少しバラけた集団の中に入り込んで行つた。

その後姿に、菅沼は今日最大の不安が過る。背筋に冷たい悪寒のよがなものが素早く走つた。

なんだ……今日起きる何かは、まど香の関係する事なのか？ そ
うなのか？

自問自答するも、具体的な何かは浮かんでこない。

思わず娘を追いかけて、保護したくなるような気持ちになつた。何故だ、何かあるならどうして思い出さない。何故忘れてこいる。そんなに重大な何かならどうして記憶に刻んでいないんだ……

一日目の水曜日を過ごしたであらう自分をひたすら恨んだ。

記憶を探ろうにも、それが何処に隠れているのかもはや判らない。そんな感じだ。

「カワイイ娘さんですね。日元がチーフに似てましたよ」

立ち竦む菅沼に麻美が声をかける。

「あ、ああ。えつ、そうか？ 僕はあんなに睫毛は長くないぞ」

「男親に似た女の子は綺麗になるんですよ。知らないんですか？」

「へえ、そうなの。DNAのマジックだな」

「ああ、そうかも。父親の顔がどんなんでも、上手く可愛い方向にバランスがとれるんですよね」

「それって、結局俺は喜べないのか？」

菅沼はそう言って苦笑すると、住宅街に向って角を曲がるまど香

たちを横目で見ながら、駅に向かって歩き出した。

【7】予感

一階の窓から見えるのは、慌しく駅へ出入りする人波だった。この時間はビジネスマンとの姿が多いが、学生もちらほら見えるのはどういう事なのか、菅沼は何時も不思議な気持ちになる。

菅沼と麻美の二人は、手っ取り早く駅前の洋風レストランに入つた。一階は「コーヒー豆や紅茶葉などを売るショップと、お茶屋が入つていてテナントの一階だ。

窓からは駅の小さなロータリーが見えて、行き交う人の波につけ目が行つてしまつ。

「娘さんは何年生ですか？」

「えつ」

窓の外に気を取られていた菅沼は一瞬間を置いて、麻美の質問を頭で繰り返した。

「ああ、中二だよ。普通なら受験だけど、あそこは中高一貫だからこんな時期が楽だね」

「そうですか」

「まあ、週に何度も塾だけは行つてゐるけど」

菅沼は自分で言ったその言葉に、何故か引っ掛かりを覚える。

しかし、何故そんな事に何かを感じるのか判らない。

……塾？ まど香の塾がどうしたと言うんだ。確かに週に三回、月、水、金曜に行ってたかな。そうか、今日はまど香の塾がある日か……しかし、それがどうしたと言つたんだ。

「チーフ？」

菅沼が麻美の声に顔をあげると、彼女は今日幾度も見せる怪訝な笑みを浮かべている。

彼は自分でも知らぬ間に、俯いてテーブルを睨んでいたらしい。

「大丈夫ですか？ 何か悩み事でもあるんですか？」

「あ、いや。別にそう言つわけじゃないんだ」

彼はそう言つてから少し躊躇つて、次の言葉を口にした。

「中島は、『デジャヴ』って……遇つかい？」

「デジャヴ……ですか？」

麻美はそのネタが冗談なのか本気なのか測りかねて、複雑な笑みを返す。

「デジャヴによく遇うんですか？」

「ん、まあ、時々な」

「デジャヴは、過去の出来事を正したいと思つ気持ちが引き起しさせるそうですよ」

「そうなの？」

口に着けた「コーヒー カップを離して、菅沼は真顔を返す。

「いえ、確かフロイトが言つた言葉だと思いますけど」

彼女はそう言つて明るく微笑むとコーヒーのカップを傾けた。

「あたし、これでも大学では精神医学を少しやつてたんですよ。カウンセリングの勉強もしたんですよ」

「へえ、そななんだ。じゃあ、悩み事が出来たら、キミに相談するのが一番だな」

菅沼はそう言つて明るく笑つてみせた。

「あの……菅沼さん……」

麻美が何時ものチーフではなく、名前を呼んだ事は彼の耳には入らなかつた。

その時デザートを運ぶウエイトレスが菅沼の直ぐ横を通りかかつたのが見えて、彼は彼女の身体に左手を伸ばした。

その手が触れるか触れないかの距離になつた瞬間、ウエイトレスは軽く躊躇つて前のめりになる……が、ちょうど菅沼の出した手がその身体を制したのだ。

「きやつ」

ガチャーンッと少しだけお盆の上でずれた食器が音を立てたが、何も零れずに済んだ。

「す、すいません……」

慌てたウエイトレスは、赤面しながら菅沼に頭を下げる。

「ああ、いや……危なかつたね」

ウエイトレスの履いていたヒールの踵が折れて、躓いたのだ。

「大丈夫？」

足元に視線を下げて菅沼が言つ。

「あつ、あははは。平氣です。ヒール折れちゃいました」

彼女は再び頬を赤くして明るく笑うと、菅沼たちの奥のテーブルに無事デザートを運ぶ。

……なんだ。何故判つた？ 今自分は一瞬先に……彼女が躓くより早く手を出した。ほとんど無意識だった。彼女が躓く事を予測したのか？

記憶が自然にさわせたのだろうか……やつぱり、俺は今日を知つていい？

菅沼は思わず、半ば無意識で事前に差し出した自分の左手を見つめた。

「どうしたんです。彼女のさわり心地はそんなによかつたですか？」
麻美が再び笑つて見ていた。

「あ、ああ。いや、若い娘に触れるなんて、そつそつ無いからね」
彼の冗談に、思わず麻美は吹き出した。

菅沼は思わず、半ば無意識で事前に差し出した自分の左手を見つめた。

「どうしたんです。彼女のさわり心地はそんなによかつたですか？」
麻美が再び笑つて見ていた。

「いやあ、先週の晩に、先輩が酒気帯びで掴まつてな」

その時、直ぐ近くのテーブルでの会話が菅沼の耳に飛び込んできた。

「馬鹿だな。俺はもう絶対に飲んだら運転しないぜ」

「俺だつてそうさ。罰金の値上がりもそうだけど、あんな事故は起こしたくないからな」

あんな事故とは、半年前に立て続けに起こった酒気帯び、いや酒

酔い運転の挙句に人身事故を起こして相手を死亡させたケースの事を言っているのだろう。

「でも、逃げてから酔いを醒まして出頭する奴は、悪知恵働くよな」

「そう言つ奴は何処にでもいるんだろ。変な事だけ頭が回る奴な」

菅沼は何気に聞き耳を立てながらも、レジのお釣りを受け取ると、麻美と一緒にレストランの階段を下りた。

菅沼は電車に揺られながら考えていた。

酒酔い運転……そのキーワードにも何かを感じる。一体どうしたと言つのか。今日は何故こんなにも沢山の事柄が頭に引っ掛かるのか、謎は深まる一方だった。

今まで何度もデジヤヴを経験しているが、こんなに胸騒ぎを感じた事はない。いや、少しも感じたことが無いと言つた方がいいだろ。

せいぜい自分は水曜日を何度も繰り返しているとか、突拍子も無い事を思いつくのが関の山で、本能が何かを感じて心がざわめくような感覚は今日が初めてなのだ。

もう今日を繰り返しているかそうでないかは問題ではなかつた。ウエイトレスを支えた左手は明らかにそれが起こる前に差し出したのだから。

それよりも、どうしてあの時だけ事前の予測が出来たのか。しかも、ほとんどが無意識下の行動だった。

今までは必ず何かを見て、それから気付くだけだったのに。もちろん、だからデジヤヴなのだが……

昼過ぎの電車は意外と空いていた。

窓の外を眺めて思案を巡らせてはいるとあつという間に会社のある駅へ到着し、麻美に声をかけられる前に菅沼は自分から彼女を促した。

【8】キッカケ

会社に着いてからも、菅沼は仕事が手に付かなかった。

今日の打ち合わせの内容は、麻美がプランニングしているので問題はないが、夕方の会議に使う資料をまとめなければならない。

それでも何とか休憩ロビーを行ったり来たりしてタバコを何度も吸つて気分転換しながら資料はまとめた。

時刻はもう直ぐ5時になるところだった。

窓から見る外の景色は次第にほの暗くなつて、遠くの空に陽が沈んでいくのが見える。

……昨日の、いや一度田の今日も、俺はこの景色を見ていたのだろうか……

今日の胸騒ぎはいつたいなんだつたのか……

「チーフ、お茶の葉を買ってくるんですけど、ついでに買つてくるものありますか」

麻美が休憩ロビーに顔を出した。夕方の会議で使うのにお茶の葉が切れたのだろう。

コーヒーを好む者とお茶を好む者がいる為、両方用意するのが常なのだ。

本来はもつと下つ端の娘がやるべき事なのだが、彼女はいろいろと世話係が好きらしく、余計な雑用も進んでやるのだ。

「ああ、タバコ買って来てくれ」

菅沼は、そう言つてポケットから小銭を取り出す。

「マルボロメンソールですよね。吸い過ぎには注意ですよ」

麻美はそう言つて小銭を受け取ると、笑顔のままエレベーターへ向つた。

菅沼はオフィスへ戻るつとして、手持ちのタブレットも無くなつている事を思い出した。

習慣なのでタバコ同様無いと淋しい。

彼は麻美を追いかけてエレベータを待たずに階段を駆け下りた。

一階のロビーを抜けると、入り口に麻美の後姿が見える。

「中島」

菅沼の声に彼女が振り返った。

「どうしたんですか？」

「タブレットも買って来てくれた。ミントのやつな

「わざわざ走って来たんですか？」

「ああ、何だか無いと落ち着かないならね」

菅沼はそう言って、再びポケットを探るがもう小銭は無かつた。

「いいですよ。あたしが出して起きますから」

そう言って笑うと「携帯に掛けてくれればよかつたのに

「ああ、そうだ。そうだったな」

彼女の言葉に、菅沼も思わず苦笑して肩を落とす。

菅沼はどうも普段から何でも携帯電話で済まそうとこう気が働かない性格だった。直接会って言える事は、極力そうするのが習慣になっている。

その時、表通りで急ブレーキの音がして、一人は振り返った。横断歩道を渡ろうとした歩行者が、右折車にぶつかりそうになっていた。

もちろん、歩行者をよく見ていなかつた車に非がある。

しかし、その危うい光景を見た菅沼の脳裏に一瞬で何かの映像が飛び交つた。

背筋がゾクゾクと疼いて悪寒が這い回り、思わず身震いした。

一瞬脳理を飛び交つた映像は、包帯でぐるぐる巻きになつた愛娘や泣き崩れる妻の映像だった。

それが本当に一度目の水曜日の光景という確信はない。しかし、彼にはじつとしている事など出来なかつた。

「まど香……」

「えっ？」

麻美には菅沼の呟いた意味は判らなかつた。

「悪い、中島。会議はお前が俺の代理で出でてくれ」

「はあ？」

菅沼はそれだけ言つと、そのまま走り出やつとするが、直ぐに踵を返し

「中島、金貸してくれ」

「えつ？ どうしたんですか」

「わけは後だ。いくら在る？」

「麻美が財布から一万円札を出すと、菅沼はそれを掴んですぐ返すからな。借りるぞ」

そう言つて、歩道を走り出した。

まど香が事故に遭うんだ。そつだつたのか。俺はそれが救いたい一身で事在ることに何か引っ掛かりを感じていたんだ。

まど香は何処で事故に遭うんだっけ……

菅沼はさつき見た一瞬の映像を元に、一度田の水曜日を次々に思い出す。

……塾だ。塾へ行く途中と言つていた。

陽はもうすぐ沈みきる所で、あたりはだいぶほの暗くなつて電飾看板の明かりがやたらと目立つていた。

そして、菅沼は突然立ち止まる。

……まど香の塾は何処にあるんだ。自分は娘が何処の塾へ行つているかも判らない。

菅沼はジャケットの内ポケットから携帯を取り出すと、裕美子の携帯に電話した。

「もしもし、どうしたの？」

電話に出た裕美子は相手が自分の亭主だと言つて気に付いていた。着信の表示を見たのだろう。

電話の後ろはやけに賑やかで、全員主婦にも関わらず女同士だとこんなにも騒がしいのかと菅沼は多少あきれ果てた。

「お前、今何処だ？」

「まだバスよ。首都高に入つたから、そんなには掛からないけど。

何かあつたの」

「いや、まだ」

「まだ？」

「あ、いや……それより、まど香の塾は何処にあるんだ？」

「どうしたの急に。……そう言えば今日あの娘塾だけ行つてないとか」

「もう塾は始まつてゐるのか？」

「ああ、そう言えばまだ五時だわ」

「何時もは何時からだ？」

「六時からよ。ねえ、どうしたの？」

「後で話す。塾は何処だ？」

「隣駅から少し行つたビルの所」

「隣駅つて、ウチから近い駅の隣か？」

「当たり前じやない」

「少しつて、どうちへ」

「はあ？」

「あそここの駅前は三差路に別れてるだろ」

「そうだつけ？ どつちだろ。真つ直ぐじやない」

「真つ直ぐはないぞ。右に一本と、左に一本通りが出てるんだ。真ん中つて事か？」

「そんなの忘れたわよ」

「……なんて奴だ。娘の身が掛かつてゐるといつの」。しかし、そんな事を言えるわけも無い。

「もういい

菅沼は電話を切るとタクシーを拾つて、とつあえず田町の駅へ急いだ。

もう直ぐ目的の駅に着くといつ頃、タクシーは急に減速して止まつた。

菅沼は助手席のシートに手を置いて前のめりに前方の様子を覗う。すると、前方に工事の札が見える。

「なんだ、どうしたんだでしょうね」

タクシーの運転手は、ルームミラー越しに菅沼に向って言つた。

「通れないのか？」

少し先は、道路が水浸しになつていて。

「ありや、水道管ですね。工事中に傷つけたんだな」

運転手は窓をあけて車をゆっくりと進めるが、警備の男は迂回するように赤く点滅する棒をグルグルと横に向つて振つてている。その赤い光が鮮明に見えるのは、夕暮れが迫つていていた。

「通れないの？」

運転手が警備の男に声をかけた。

「はい、今水道管をやつちやつて。業者が来るまで無理ですね」

「でもここ曲がつたら一通で戻つちやつじやなこ」

「そつなんですけどね……それから他の道に出てもらつじか」

道の先は緩いカーブで見えないが、もう駅は目の前なのだ。

「じゃあ、俺は降りて歩くよ」

菅沼はポケットから麻美に借りた一万円を差し出した。

「直ぐ駅なんじょ」

「ええ、警備員が示す方の路地へ入つてから、左へ行けば駅ですよ。車は逆の一通だから行けないんですがね」

菅沼は運転手からお釣りを受け取ると

「判つた、ありがとう」

そう言つて、降りたタクシーを後にして駅へ向かった。

暮色に染まる駅前周辺は、帰宅する人波で溢れていた。ロータリ

一とは呼べない駅前に立つた菅沼は三本ある通りを見渡す。しかし、ふと何かが気になつた。

何かが違う。何かがおかしいと感じたのだ。

彼は目を伏せて空を仰いだ。

……何だ。何が腑に落ちないんだ。思い出せ、あの時見えた映像と声を思い出せ。

大通りの直線……そうだ。まど香が交通事故に遭つたのは大通りと聞いていた。しかし駅前の通りはどれも片側一車線の大通りとは言い難いものだ。

この周辺の何処かに娘の通う塾が在るのは確かだろう。しかし、彼女が事故に遭つた場所は駅前ではない。

何処だ……まど香は何処で事故に遭つたんだ……

菅沼はあの時事故の状況を詳しく訊きいたはずだ。いや、裕美子の知つている事を聞いたに過ぎない。もしかして、彼女も事故現場が何処かは詳しく知らなかつたのかもしれない。

菅沼はとりあえず裕美子の言つた真つ直ぐと言つ表現に当てはまる道を探した。

駅から見て道は三本。右斜め方向から一本と左の線路に沿つように抜ける道が一本だ。

……やっぱり真ん中の道の事なのか？

一番右は、さつきの工事で迂回させられた道路だ。

菅沼はとりあえず真ん中の道を歩道に沿つて歩く。それは今路地を抜け出でから、駅に向かつて歩いて来た道だ。少し先はカーブしていく、何処へ向つているのか判らないが、おそらく国道へ出るのだろう。

大通りはどうなつてる？

彼は頭の中で地図を思い描いて見るが、来慣れない立地と碁盤の目にはなつていかない区画が、菅沼を混乱させる。

ふと見ると、駅からそう離れない場所には雑居ビルに居酒屋の看板が目立つが、コンビニの二階が塾になつてているのを見つけた。

心が逸る。……」こか？

菅沼は迷わず階段を上がって、塾へ入って見る事にした。時計を見ると5時半を回っている。

まど香が事故に遭った正確な時間は判らない。塾へ行く途中と言う事しか判らないのだ。だから、まずその塾が何処に在るのか知る必要があると思った。

……事故の時刻、裕美子は旅行から帰っていたのだろうか。菅沼はまど香が事故に遭った時間が気掛かった。

先ほど携帯に掛けた時にはまだバスの中だった。しかし、首都高速に入ったと言っていたから、彼女が家に着く前にまど香は事故に遭つたに違いない。

そうだ、あの日、いや実際は今日なのだが……病院で見た裕美子は外出着のままだった。家には帰つてないか、または帰宅して間も無く連絡があつたのだ。

しかし、自分に連絡があつたのは残業が片付いた七時半頃だった。どうして直ぐに連絡しなかつたのか……そうだ、会議で携帯の電源を切つたままだったんだ。

次々に菅沼の中に一度目の水曜日の出来事が浮かび上がる。コンビニの横の階段を上ると、三つ部屋が見えた。二つは教室で、一つは講師の準備室みたいだ。

すると、その準備室から一人の女性講師らしき人物が出て来たので、ちょうどいいとばかりに菅沼は彼女を呼び止める。

「すいません、こここの講師の方ですか？」

「え、ええ。そうですけど」

「こここの教室に菅沼まど香といつ娘はいますか？」

「あの……失礼ですけど、どちら様で？」

どうにも不審な目で見ている。最近は青少年を狙つた犯罪が多いから仕方が無いのだろう。

「父親です。菅沼まど香の」

「ちょっとお待ち下さい」

彼女は再び準備室のドアを開けると

「何年生ですか？」

「中3です」

準備室の中には四つの事務机が向かい合わせに並んで、壁際には事務用の整理棚が置いてある。六畳ほどの小さな部屋だった。

彼女はドアを開けたまま、整理棚から生徒名簿らしきものを取り出してパラパラと眺めると

「菅沼まど香さんは、うちににはおられないようですが……」

彼女は再び怪訝な顔で菅沼を見つめる。

「そうですか。いや、娘に急用なのですが、この近くの塾としか聞いてなくて。何でも母親任せだったのが、今更ながら恥ずかしいです」

菅沼の言葉を聞いて、女性講師は母親に何か不幸が起きて父親が娘を連れに来たのだろうと勝手に解釈した。

「それでしたら、この一本向こうの通りにも学習塾が在りますからそこではないですか？」

急に優しい笑みを浮かべる彼女に、今度は菅沼が妙な印象を受けたが、まさか自分が言つた言葉を勝手に彼女が別の解釈をしているなどとは思いも寄らない。

「有難う御座います」

菅沼は直ぐに踵を返して階段に向つた。

「あの」

背中から女性講師が呼び止める「あの、携帯電話は持っていないのですか？」

菅沼はその一言で、自分の愚かさを認識した。

「……そうだ。携帯電話が在るではないか。どうして真っ先にそれに気付かなかつたのか。まど香に連絡して、大通りの歩道を歩かないように言えればいいのだ。

【10】事故

菅沼は塾の階段を下りると直ぐに、まど香の携帯電話にコールした。

繋がらない。話中だった。

……くそつ、こんな時にまど香の奴なにやつてるんだ。

そう思いながら時計を見るともう五時四十分を過ぎている。駅から見て左に向っている道路は、20メートルほど行くと直ぐに、大きなレンガ調の外壁のビルから入る路地があった。しかもそれは思いの外道幅は外広い。対向一車線だがセンター・ラインもあるし、歩道も備えている。

角を曲がって三軒隣のビルには、確かに学習塾の看板が出ていた。そして、その道路の向こう、200メートルほど先には大通りを行き交う車のヘッドライトが見える。

何故ヘッドライトの光を見ただけで大通りと判断できたのか。

それは、走るライトの数が以上に多かったのだ。それが一車線道路ではないと、菅沼は直ぐに気付いた。

そうしていると、何人かの子供がビルへ入って行くのが見えた。

「あ、キミちよつと」

まど香と同じくらいの男の子に声をかけると、相手は子供ながらに怪訝な顔で振り返る。

「この塾に、菅沼まど香って女の子はいないかな」

「さあ」

彼は異常に素つ氣無い態度でビルへ入って行った。

……なんだあれは？

再びビルの入り口へ来た、今度は女の子に声をかける。

「あ、ちよつとキミ」

彼女はとりあえず立ち止まつたが、やはり怪訝そうに、そして不安げに菅沼を見上げた。

彼は、自分がまど香の父である事を告げてから、娘の事を訪ねた。

「あたし、高校なんだけど」

「あ、ごめん」

大人しそうな身なりのわりに、少し乱暴な考え方の少女に彼は一瞬、ギョッとした。

「まど香に何か用ですか？」

その時、菅沼のすぐ後ろで声がした。

振り返ると、背丈はあるがやせ細つて何処か華奢なイメージの男の子が立っている。

「ああ、まど香はボクの娘でね。ちょっと急用なんだ」

「まど香……まど香さんなら、他の友達と寄るところが在るつて言つてましたよ」

「キミは？」

「同じクラスの安藤つて言います」

「まど香はこここの塾なんだね」

思わず菅沼が確認すると、途端に安藤の顔が曇る。

「え、ええ。そうですが、お父さんなのに知らないんですか？」

「あ、いや……とにかく有難う」

菅沼は、そのまま塾を後にして大通りを目標として歩き出すと、直ぐに足早になつた。

小走りになつて再びまど香の携帯にメールする。まだ話中だ。

……くわつ、誰と話してるんだ。こんな時に。時計を見ると、もう五時五十分になるとこりだ。

菅沼はとにかく走つた。

大通りまでは200メートル在るか無いか。そう遠い距離ではない。しかし、間に合つだらうか。まど香が事故に遭つまではもう何分も無いだらう。

再びまど香にメールを入れる。

しかし、まだ話中だ。

その時、突然細い路地から大型のスクーターが飛び出して來た。キキッとギリギリで停まつたものの、菅沼は軽くそれと接触して歩道に倒れた。受身をとろうとわざと一回転したのがよくなかった。何かが割れたガラス片に膝を着いてしまつたのだ。

「うつ……」

今時はほとんどペットボトルが使用されているのに、いつたい何が割れたものなのか判らなかつたが、日本酒の空きビンのよくなつ感じはした。

「大丈夫ですか？」

バイクの男が慌てて、バイクを降り菅沼に駆け寄る。

「あ、ああ」

彼は男の行動には目もくれずに曖昧な返事だけを返して、大通りへ向おうと足を踏み出した。

「うつ……」

右脚に痛みが走つた。

思いの外傷が深いのか、生ぬるい血液の感触が脛を伝つのが判つた。

「くそつ」

構わず駆け出しが、踏み出す度に切れたであろう右膝がズキズキと痛んだ。

時計を見ると五十五分になる。

まじ香は何処だ。ここを通るんじゃないのか。さつきの塾に来るんじゃないのか。

再びまじ香の携帯電話に「ホールするがまだ話中だ。

……おかしいぞ。こんなに長電話をするなんておかしい……いつたい誰と話しているんだ。それとも、もう、事故に遭つて壊れた携帯電話が通話中になつてしまつているのか？

菅沼は痛む足でとにかく前に進んだ。あの大通りまではどうしても行かなくてはならない気がしたのだ。

それがもう目の前だと言う時、突然大通りから激しいブレーキ音

と何かのぶつかる音が、完全に暮れた夜気を震わせて響き渡る。

金属が擦れる音、ぶつかる音。そしてガラスが割れる音が確かに確認できた。オイルの焼けたような、焦げ臭いような臭いが風に乗つて菅沼の鼻孔にも届いて来た。

「まど香……」

菅沼は足の痛みも忘れて走っていた。

夕方に見たフラッシュバックが再び脳裏に蘇える。

全身包帯のまど香の顔は腫れ上がって、瞼の開く気配など全く無い。

人工呼吸器の定期的な音が鼓膜の奥に響き渡る。

……俺はいつたい何をしていたんだ。こんな足の痛みくらいでいつたい……娘が植物状態になるのを防がなければいけなかつたのに。こんな膝、どうだつていじやないか。

俺は何て情けない奴だ。自分の娘一人守れないなんて……

大通りに出た瞬間、菅沼はわが目を疑つた。

粉塵か煙か、とにかくその通りは微かに煙つていて、オイルとガソリンの臭いが鼻を突いた。

信号機の支柱がグニャリと曲がつて、一台の車はボンネットから煙を上げて止まっている。

しかし、支柱を曲げたにしては、止まっている車は向きが大分ずれている。

……そうだ、事故を起こした車は逃げたんだ。

広い歩道には数人の野次馬が既にまばらに立ち止まつていて、菅沼はそれを搔き分けるように現場の前に出た。

歩道と車道を仕切る柵もグニャリと曲がつてている。

「怪我人は?」

直ぐ横にいた男の肩を掴んだ。

「いや……怪我人っていうか、あの車の運転手くらいじゃないの。ぶつかった奴はサッサと逃げちゃつたし……」

男は路上で止まっている車を指差す。

……そんなバカな。この事故は違うのか？　これは、まど香に関する事故なのか……

「通行人は誰も怪我しなかったのか？」

「たぶん。俺を見てた限りでは……」

菅沼は訳が判らずに、グーヤリと曲がった歩道の柵を見つめた。確かに周囲に血痕などは見当たらないし、誰も倒れていない。事故はここだけじゃないのか……他でも起きるのだろうか。

菅沼が焦りを露に思考を巡らせていたその時

「お父さん？」

後から聞き覚えのある声が聞こえた。

鼓膜に染み渡るそれは、何ともいえない懐かしいものに思えて、一瞬空耳にさえ感じた。

菅沼は肩で息をしながらゆきくじと振り返る。

そこにはまど香の姿があった。

何處も怪我などしていない。昼間会つたままの元気な姿で、愛くるしい瞳を見開いている。

「ど、どうしたの？　そんなカツコウで」

まど香はそう言いながら父親に歩み寄る。

菅沼はバイクと接触して転げた為に、背広もズボンも砂と誇りまみれだつた。しかも、ガラス片で切つた右膝は小さく破れ、血が流れでズボンの裾口までを黒く染めていた。

「ま、まど香……」

菅沼は思わず娘を抱きしめた。

「な、なに？　どうしたの。なんでこんなにボロボロなの？」

まど香は事情が判らずただ父親に抱きしめられて、窮屈な思いをしながら周囲に対して恥ずかしさだけが込み上げていた。

【1-1】水曜日の夜は初めてのバーへ【最終話】

「お前、塾は？」

固く抱擁した後で、菅沼はまど香に訊いた。

「い、これからよ」

「六時からだろ」

「友達とアイス食べてたら、ちょっと遅くなっちゃう。途中でお母さんからも電話が来たし」

まど香が長電話をしていたのは母親の裕美子だったのだ。考えてみれば、家族間通話はいくら話しても通話料金が無料なのだ。

「お父さんこれ、あたしの塾に何の用？　お母さんが言つてたよ」

「いや、塾じやなくて、お前に用事だったんだ」

「だったら携帯に掛ければいいのに」

「いや…… そなんだが」

慌てるあまり、直ぐに氣の回らなかつた自分を思わず自嘲する。

「あ、お父さん、脚どうしたの？　血が出てるよ」

まど香がしゃがんで、ズボンの裾を指の先で触つて、父親を見上げる。

「どうしたの？」

「いや、ちょっとな」

苦笑するしかなかつた。

何だか慌てまくつた自分が、ちょっとバカみたいに思つた。結局まど香は事故の危機には直面していないのだ。

「それより、お前。早く塾に行きなさい」

「でも、血が……」

菅沼は膝のキズの痛みを堪えてしゃがみ込んでまど香と視線を合わせると

「だいじょうぶだ、こんなキズ。早く塾へ行きなさい」

そう言って微笑んで見せた。

まど香は少し怪訝な笑みを返すと「うん」と頷き、自分の鞄から絆創膏を取り出して父親に渡した。

「じゃあハイ、とりあえずこれ貼つとして。帰つたらお母さんにお当てしてもらつてね」

「ああ」

彼女は立ち上がりながら少し大きな声で返すと、まど香が小走り

「あ、今晚はすき焼きだつてさ」

再び振り返つたまど香の笑みは、横のタバコ屋の明かりに照らされて輝いて見えた。

「ああ、うまそうだ」

菅沼は立ち上がりながら少し大きな声で返すと、まど香が小走りに駆けて行く姿をしばらくの間見つめていた。娘にもらつた絆創膏を握り締めて。

……それにしても、どうしてまど香は事故に巻き込まれなかつたんだ。

自分が助けなければならぬとばかり思つていたのに……それとも、やつぱり一度目の水曜日なんてものは無くて、全ては俺の妄想か夢の出来事だったのか？

少し前に耳にしたゴッドスポットという言葉を思い出した。

脳内の側頭葉で起きる現象で、視覚で見えていないものが見えてしまう症状らしい。

それは、ある意味本人にとっては現実で、他者から見れば幻覚なのだ。

今まで感じていたものは、結局自分の中での勝手な幻想でしかなかつたのか。

そして俺は、これからも意味の無いデジャヴに遭遇するのか……

菅沼は途端に果てしなく空虚な思いに包まれ、自分の存在意義さえも見失いそうになる。

その時だ。

「あなた、水曜日なんですか？」

見知らぬ男に突然声を掛けられて、菅沼は振り返った。

「はあ？」思わず眉を潜める。

「私、火曜日なんですよ。気付くと面白いですよね」

男はそう言って、不気味な笑みを浮かべる。

黒いスーツに青いネクタイをして、シルクハットを被っている。身長は170センチちょっとの菅沼と大差はないが、不健康なほどに身体は痩せ細っていた。

黒ずんだ顔には無数のシワが刻まれて、その割りには眼光が輝かしいので、年齢はまるで読み取れない。

「でもね、一度目を変える場合は、何も直接関わらなくても、ちょっと軌道を変えてやれば、それで周囲の未来は変わるもんなんですよ」

男は瞳をギラつかせて笑う。

「一度目つて……やつぱり今日は一度目の水曜日なのか？」

菅沼は男の虹彩の中心でブラックホールのように漆黒の渦を巻く闇を見つめた。

「でも、この世界中でそれに気づく人間て、どれだけいるんでしょうね」

それだけ言うと、怪しげな笑みの残像だけを残して男は菅沼の前から立ち去つていった。

陽炎のように揺れながら大通りの歩道を歩く男の背中は、途中で闇に紛れて見えなくなつた。

……軌道を変える？

そう、菅沼は一度目の水曜日には裕美子に電話を掛けていない。彼女に電話を掛けた時点で、既に一度目の水曜日は一度目と違うものになつていたのだ。

そして菅沼の電話を受けた裕美子はまど香の携帯に電話を入れた。それが事故に巻き込まれるはずのまど香の行動に、僅かなズレを生じさせたのだろう。

もちろん、これはあのアヤシイ男の言葉から、菅沼が勝手に推測したに過ぎないのだが。

彼は、右脚を少し引きずりながら近くに在った自販機に歩み寄ると、冷たい缶コーヒーを買った。

プルタブを開けてそれを一気に喉へ流し込むと、鳥をついて紺青の空を見上げる。

まったく星の無い夜空だ。

このコーヒーを飲むのも、この空を見上げるのも、おそれくこれが初めてだらう。

菅沼は足の痛みも忘れて、見上げた夜空に向つて思わず笑みを零した。

了

【1-1】水曜日の夜は初めてのパーティーを【最終話】（後編）

最後まで読んでいただき、有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8088c/>

水曜日の朝は二度目のコーヒーを
2010年10月8日15時33分発行